加藤清正の実像

Kato Kiyomasa

慶長3年（1598）6月頃から病状が悪化していた豊臣秀吉は、8月に入ると自らの死期が近いことを悟り、徳川家康や前田利家らを呼び寄せて、息子・秀頼の行く末を託します。そして8月18日、伏見城で波瀾に満ちた62年の生涯に幕を閉じます。

〈17〉秀吉の死と朝鮮からの撤退

慶長3年1月の過酷な蔚山城籠城戦を生き延びた清正は、そのまま蔚山城への在番を命じられ、帰国するまでここに駐留することになります。清正は、籠城戦で壊滅的被害を受けた蔚山城の修復をおこない、明国・朝鮮連合軍の再襲来に備える一方で、独自のルートで明国側と講和交渉を模索します。

そのような中、秀吉の死去を受けて、朝鮮の日本軍に撤退命令と秀吉死去の報を伝えるため、10月1日に徳永寿昌と宮木豊盛が、日本から朝鮮へと渡ります。秀吉の死去から両者が朝鮮へ渡るまで1か月以上も間が空いていますが、秀吉死去の知らせは、朝鮮に在陣する日本軍の動揺を引き起こし、戦況に大きく影響する恐れがあるため、その死はしばらく秘匿されました。また、敵方への情報漏えいを防ぐため、この両者は秀吉の名で出された朱印状を携えて朝鮮に渡っています。その朱印状には「秀吉自身は回復に向かっている」とさえ記されてあり、あくまでも対外的には、秀吉健在を装い続けたのです。しかしながら、死去直後から日本軍内部だけではなく、明国・朝鮮軍の間にも秀吉の死去、あるいは重体の噂は取り沙汰されており、この隙を突いて両軍は各地で攻勢に転じます。清正が守備する蔚山城も、9月20日から断続的に攻撃を受けています。

この両者の口から正式に朝鮮の日本軍に秀吉死去の知らせがもたらされます。10月中旬には全軍に対して、朝鮮王子の来日、もしくは日本への朝貢（貢ぎもの）を条件とする講和交渉をまとめたうえで、全軍撤退すべしとの方針が伝えられます。この撤退に向けた交渉において、日本の政権上層部からその交渉役に指名されたのが清正でした。それまで独自に進めていた和平交渉の下地もあり、且つ敵軍に対する知名度もあることから交渉がスムーズに運ぶと判断された結果だと思われますが、その後清正が撤退に向けて敵軍と交渉をおこなった形跡はありません。

先述したように清正は、慶長3年2月から蔚山城に在番していましたが、清正が秀吉の訃報に接するのは、徳永・宮木の両者が釜山浦入りした10月1日から間もない時期だったと思われます。釜山浦と清正のいる蔚山は、わずか40kmほどしか離れておらず、その情報はすぐに清正のもとに伝えられたものと考えられます。当時の史料からは、主君・秀吉の死に対する清正の心情をうかがうことはできませんが、出世の大恩人であり絶対的君主であった秀吉という大きな存在を失った悲しみと、7年におよぶ朝鮮出兵がようやく終わりを告げるという一種の安堵感など、さまざまな感情が入り混じった複雑な心境だったのではないでしょうか。

しかし、清正は感傷に浸る間もなく、朝鮮からの早期撤退という現実的な問題に対処しなければなりませんでした。徳川家康は、10月19日付けの書状で「黒田長政と相談のうえ、釜山浦へ移り、帰国しなさい」と日本から清正へ撤退命令を伝えます。この書状が、秀吉亡き後の政権運営を託された家康を含めた五大老と呼ばれる数名の実力者の連名ではなく、家康が単独で発給しているところに、豊臣政権内部で親家康派を形成するための政治的意図がうかがえます。すでにこの時から、政権内部の主導権争いをめぐる駆け引きが、水面下で始まっていたと言えるでしょう。この家康書状が11月中旬に清正のもとに到着すると、清正は撤退を決意します。そして、11月16日に清正は泗川にいる島津義弘らに対して「撤退命令が出ているので、明日17日に蔚山を脱出するつもりである」と述べ、さらには泗川にいる島津軍救援、順天で苦戦している小西行長軍の救援に向かう用意があることも伝えます。しかし、結果的に清正は自軍の撤退を優先させて、蔚山城を放棄して釜山浦に向かいます。

釜山浦に着いた清正は、日本陣営を焼き払い、11月23日に朝鮮を離れます。27日に壱岐に寄港した後、12月2日に博多へ帰陣して、ようやく帰国を果たします。しかし、日本の土を踏んだ清正を待ち受けていたのは、秀吉亡き後の豊臣政権内部の権力争いと長年の朝鮮出兵で疲弊しきった肥後領内の再建でした。

このコーナーは、大浪 和弥さん（元熊本博物館学芸員）が執筆しています。